「3年後の世界が見える」ー CES2026 視察レポート ー

国際部　浦野創

毎年1月、米国・ラスベガスで開催される「CES」は、各国の企業が最新プロダクトや先端テクノロジーを発表するため、「3年後の世界が見える」イベントとして世界中の注目を集めます。今年 1 月 6 日から 9 日まで開催された「CES2026」を現地視察した感想や最新動向などを報告します。

「CES」とは

「CES」はもともと「Consumer Electronics Show」というタイトルで、米国内の量販店向けに家電の新製品を紹介する見本市として 1967 年にスタートしました。その後、1970 年代のビデオテープレコーダーや 80 年代の CD プレイヤー、家庭用テレビゲーム、90 年代の DVD、2000 年代のプラズマディスプレイなど、時代を切り拓く画期的な新製品が、世に出る前に最初に必ずこのイベントで発表されるようになりました。ここで発表された製品が2～3年後には世界中で使われるようになり、人々のライフスタイルを大きく変えてきたことから「3年後の世界が見える」イベントとして、米国のみならず、世界中の注目を集めるようになりました。

その後、2010 年代に入るとドローンや自動運転など出展分野が多岐にわたるようになり、「Consumer Electronics」の範疇におさまりきらなくなっていきました。また、「家電」というイメージを薄めたいという主催者の意図もあり、2016 年に正式名称を「CES」（シー・イー・エス）に変更しています。

ちなみに日本では「セス」という呼び方が浸透していますが、これは日本だけの造語で、現地で「セス」と言っても通じないことがあります。

主役の変遷

私が最初に CES に参加したのは 2020 年 1 月ですが、その当時会場内で一番目を引いたのは「空飛ぶクルマ」でした。世界各国の関連企業がこぞってプロトタイプを展示し、プロモーションビデオでは「バック・トゥ・ザ・フューチャー Part2」よろしく、都会の空を数人乗りのクルマが飛び交う未来が描かれていました。素人ながら「そんなに簡単にできるわけない」と斜に構えて見ていましたが、一方で技術進化のスピードを考えると、ひょっとするとすぐに実現するかもしれないとも思い、少しワクワクしたものです。

「空飛ぶクルマ」

他にも、大手自動車メーカーが勢ぞろいし、メルセデスが自動運転車を、トヨタが「ウーブン・シティ」を発表し、大きな話題となったのも 2020 年でした。毎年1月にデトロイトで北米モーターショーが開催されていましたが、大手メーカーが CES に出展したため、開催時期を 9 月に移さざるを得なくなったというエピソードもあるほど、業界を越えて影響力を持つイベントです。

その後コロナによる中断を除いて毎年視察して来ましたが、昨年の「CES2025」では「空飛ぶクルマ」はほとんど姿を消していました。2020 年当時はまだ机上の構想段階で、自由に「夢ものがたり」が語れた時代でしたが、実用段階に入って無責任なことが言えなくなったことが背景にあるようです。

また自動車メーカーも 2025 年にはすっかりいなくなりました。こちらも自動運転などの技術自体が後退したわけではなく、実用段階に入ったため、CES で未来像を PR するフェーズではなくなってきたことが理由と思われます。先述のデトロイトのモーターショーは 2025 年から従前通り1月開催に戻しています。

このように CES はその時々の時流や情勢、技術の変化などによって出展企業や展示内容が変わりますが、巨大なイベントであるにも関わらずテーマや主役が柔軟に変化することも魅力の一つです。

「CES2026」の動向（1）－フィジカル AI と半導体

前置きが長くなりましたが、ここから今年の CES2026 の報告になります。ニュースなどで盛んに報道されていたため目にした方も多いと思いますが、家電製品はほぼ姿を消し、BtoB のプロダクトやサービスが主役になっていました。その特徴を一言でいうと「フィジカル AI」と「中国」に尽きます。

従来の AI は重力や摩擦、抵抗といった物理的な情報の処理を苦手にしていましたが、技術進化によってこれらの問題が解消され、画面の中だけでなく重力や摩擦がある「現実の世界」で、自ら判断して物理的に動くことができるようになったのが「フィジカル AI」で、実装した代表例が自律型ロボットです。

会場内では多くのヒューマノイド（ヒト型ロボット）が展示され、ボクシングをしたり、コーヒーを淹れたり、ラスベガスらしく「ブラックジャック」のディーラーとしてカードを配るなどのパフォーマンスが繰り広げられていました。

人間とボクシングするヒューマノイド（ヒト型ロボット）

高度化した AI を動かすには超高性能な半導体が不可欠です。フィジカル AI 向けで圧倒的なポジションを占める NVIDIA（エヌビディア）や AMD などの半導体企業が大きな注目を集めていたため、長年視察している専門家は「今年の CES は『CES』になってしまった・・」と禅問答のようなことをつぶやいていました。まさに「Chip（半導体）

Electronics Show」と呼んでいいほど、フィジカル AI と、その心臓部としての半導体の存在感が際立っていました。

「CES2026」の動向（2）－中国企業の躍進

今回の CES のもう一つの特徴は中国企業の大躍進と言えるでしょう。コロナによる渡航制限などにより、中国企業はしばらくの間 CES においてそれほど目立った存在ではありませんでした。しかし今年はヒューマノイドロボットをはじめ、EV、センサー、メタバース分野、階段も登れるロボット掃除機など、あらゆる分野で多くの中国企業がブースを出展し、会場のいたるところに「Shenzhen（深圳）」「Guangzhou（広州）」などが社名に入った看板が並んでいました。出展社数について主催者の正式発表はまだありませんが、全出展企業数の3割超、約 1,500 社を中国企業が占めたという報道もあります。先ほどの禅問答の続きでいうと「China Electronics Show」とも言えるほど、中国色が強くなりました。

会場を埋め尽くす中国企業のブース

ここで疑問なのが、昨年来のトランプ関税やその対抗措置としての中国のレアアース輸出規制などで米中関係は極めて悪い状況にあり、とても CES に多くの中国企業が参加できるような環境とは思えないのに、なぜこれだけ出展しているのかという点です。これについてもいろいろな人に聞いてみましたが、「結局アメリカも中国もしたたかだよ。どれだけ政治的に対立していても、ビジネスの話になると何もなかったかのようにしらっと普通に会話している。これが世界のビジネスの本質だよ」という話をしていて、妙に納得しました。

中小企業診断士としての向き合い方

時代とともに姿を変え、主役が交代する CES。ここで得られる情報に中小企業診断士はどのように向き合っていけばいいでしょうか。

今年大きな潮流になっていたフィジカル AI ですが、これらの最先端 AI テクノロジー企業を支援先に持つ診断士の方はそれほど多くないと思います。一見、我々の仕事とはあまり関係なさそうですが、大事なのは AI そのものではなく、AI による事業・経営への影響やユーザーとしての活用方法、新しく生まれるチャンスを見定める感性です。

19 世紀、アメリカでゴールドラッシュが起こったとき、結局一番儲かったのは金を掘り当てた人ではなく、スコップを売った人だという例え話があります。AI を金だとすれば、その周辺でビジネスチャンスはいたる所に現れます。「ロボットのボクシングなど自分には何の関係もない」と思わずに、頭の体操として新しいビジネスの端緒を探すきっかけにすることも有意義だと思います。